

保育現場の事例発表

「保育現場に見る音楽に関わる子どもの表現」

中野圭祐氏（國學院大學助教・元東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎教諭）



子ども達が保育の中で音楽を楽しむ時、そのほとんどの場合、その場に保育者もいます。私は保育の現場を去ってしまいましたが、子ども達と音楽を通して同じ場を共有できることが幸せでした。子ども達が子どもらしく、伸び伸びと、生き生きと表現する音楽が大好きで、私自身もあの小さな人たちと一緒に音楽を楽しんでいました。表現する主体は子どもですが、その時保育者もその場を主体的に生きているのでしょうか。

手遊びでも、歌であっても、幼児期の子どもにとっては、覚えることや立派に歌うこと、間違えずに取り組むことが重要なのではなく、音楽が楽しいという感覚を得ることが最も重要だと考えます。その際、子どもに直接向き合う保育者は自分自身が音楽を楽しみたいという主体性を持つべきではないでしょうか。

子どもとともに音楽を楽しむ保育者の事例を取り上げながら、子どもの表現を支える保育者について考えたいと思います。

伊藤ほのか氏・伊藤幸子氏（文京区立お茶の水女子大学こども園保育士）



子どもたちと、音との出会いは、日常に溢れています。風の音、虫の声、保育者の歌声。保育室や散歩先で音に気づき、音に出会う子どもたち。音に気付いた瞬間や音を感じている表情はとても愛おしく感じます。

0～2歳児の頃には、保育者は、子どもたちと心を共にして、同じ目線になって感じたり、そつと言葉を添えたりする、ゆったりとした関わりを大切にしています。3～5歳児の頃には、子どもたちはあらゆる環境から自由に音やリズム、歌などの楽しさを感じ、遊びの中に取り入れ楽しむ姿が見られます。そして仲間と一緒に、音や様々なリズムのイメージを共有し、創造的な世界を味わうようになっていきます。

今回は、遊びや生活の中で音に気づき、音で遊び、音楽に親しんでいった0～2歳児の頃の実践事例と、子どもが子どもらしく暮らしていく中で、たくさんの音や音楽に触れ、自分の力を発揮する状況を大事にしたいと考えて保育を積み重ねた5歳児の実践事例を紹介します。